



校長会



No.51

三重県小中学校長会 広報 第51号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



芸濃クリスマスでの募金活動



芸濃クリスマスイベント



防災訓練での炊き出し



文化祭での人権劇

学校教育で言われ続けてきていることに『教育の基本は、当たり前のことを当たり前にできる人間を育てること』があり、これは昔も今も変わってはいません。しかし、以前その地域・学校で当たり前であったことが、今の地域・保護者は当たり前と感じてはいないことがあります。ここに今の教育の難しさがあり、何が当たり前なのかということから考えていく必要があります。

地域とのかわり

地域の方の中学校への関心や期待は高く、人（生徒）を大切に思ってもらっています。生徒会を中心とした「GVT（芸濃ボランティアチーム）」が地域の人たちと「芸濃地域防災訓練での炊き出し」「龍王桜マラソンのコース清掃等のボランティア」「芸濃クリスマスイベント」に参加し、地域の方とともに活動することで、生徒は地域住民としての自覚を持ち、「学校からのまちづくり」に主体的に参加できるようになってきました。将来自分の生まれたまちに誇りを持ち、この経験を糧に社会

の一人として行動・活躍できる生徒が一人でも多くなるように願っています。

保護者とのかわり

教師として生徒・保護者から信頼され、生徒にとって楽しくてわかりやすい授業を実践するために周到な教材研究をして、生徒を巻き込みながら教師自身が授業を楽しんでこそ信頼される教師・学校になると思います。また、生徒一人ひとりの保護者の思いや願いを聞き取り、その実現のための取組も行っています。

子どもたちと向き合い、奮闘している先生達のモチベーションを上げ、「結果だけを言うのでなく、答えは子どもたちの姿にある」を合い言葉に日々の取組を大切にしています。教師の仕事には大きな魅力があり、「将来の仕事は学校の先生」と生徒が言えるような生き生きと活動する教師集団をめざし、地域・保護者と一体となり、地域の宝である生徒を大切に取る取組を進める学校づくりをしていきたいと思っています。



私の学校づくり

地域・保護者から信頼される学校を

目指して 人を大切に

津市立芸濃中学校

校長 杉野 充孝

今日的課題の克服に向けて

チーム度会としての取組

度会町立度会小学校

校長 南 直 貴



一 はじめに

二〇一七年度に学習指導要領が改訂告示され、移行期間一年目の二〇一八年度もまもなく終わろうとしています。そして、いよいよ二〇二〇年度からは、新教育課程が完全実施されます。

本校では、この一年間、子どもの学力と教員の指導力の向上を重要な今日的課題と捉え、児童が主体的・対話的で深い学びが実現できるように、学校全体で組織的に授業改善に取り組んできました。その取組の一端を紹介したいと思います。

二 学力向上に向けた取組

①学調・スタディチェックの分析

全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果を全教員で分析し、子どもたちの強みや弱み等の全体的な傾向をつかみ、対策を立てて日々の授業の中で取り組んでいます。特に間違いが多かった問題については、校内研修の中で実際に解き、今後子どもたちにどういう力を付けていかなければならないのかを検討しました。

②学習規律の徹底

年度初めに子どもたちに徹底させたい学習規律の項目について全教員で確認し、継続的に指導しています。二学期からは、一学期の子どもたちの様子から、重点指導項目を設定して、学習規律の徹底に取り組んできました。

③読書活動の充実

本を読むきっかけづくりや読書の習慣化を図るために、必読書の取組を進めています。必読書として子どもたちに読んでほしい図書については各担任団で選定し、各学年の廊下に必読書コーナーを設け、貸し出しノートを使って子どもたちに貸し出しを行っています。

三 授業改善に向けた取組

①OJT研修の活用

本校には二十一人の教員が定数配置されていますが、二十代から五十代までバランスのよい年齢構成となっています。その二十一人を四つのグループに分けて、OJT研修を行っています。

四つのグループには、若手、中堅、ベテランの三層の教員がバランスよく配置されているので、若手教員の育成の場になるとともに、ミドルリーダーを育むことにもつながっています。ベテラン教員にとっても、よい刺激となり、教員全体の資質向上に大いに役立っています。

②校内研修の工夫

OJTのグループを活用して、研究授業の事後検討会をワークシヨップ形式で行っています。そのため、全体で行うより、いろいろな側面からの意見や考えが活発に出され、限られた時間の中で教員自身が学び合う貴重な場となっています。

③授業公開週間の実施

研究授業だけでなく、日頃の授業を大切にするとともに、日常の授業から学び合う風土を作るために、学期毎に十日程度授業公開週間を設定し、教員同士が互いに授業を参観し合う取組を行っています。

す。参観後は、参観者が感想シートに良かったところや改善するとともに良くないところを記述し、授業を見て学んだことを授業者に伝えるようにしています。

四 中学校と連携した取組

本校が位置する度会町は、一小一中で距離的にも近く、小中の連携が取りやすい環境にあります。その利点を活かして、学力向上のための取組の情報交換や授業参観による交流、英語の出前授業などを行っています。今後は中学校も含めたチーム度会を強く意識して、小中九年間を見通した教育活動に取り組んでいきたいと思っています。

学校の教育力を高める研修の推進

紀北町立海野小学校

校長 濱 畑 輝 好



一 はじめに

教育を取り巻く環境が変化しつつある現在、様々な教育課題に対応するために学校の教育力を高める必要があります。学校の教育力向上の中核をなすのが教職員の資

質・能力の向上です。そのため、本校ではこれまで、教職員が児童や学校、地域の実情に合わせて柔軟かつ創造的に指導内容や指導方法を探り、指導の充実を図っていくための研修を推進してきました。

二 研修のねらいと方向性を共有する

校内研修会では、本校の児童の実態やめざす姿を職員全員で明らかにし、研修のねらいをはっきりと打ち出すことで研修の方向性を明確にしていきました。研修を進めていくことで自分たちの指導力を高め、指導の充実を図ること、みんなのベクトルをそろえて進めていくこと、そうして、学校の教育課題や研究主題に向けて成果を出すこと、などを全体で確認しました。

本校は、一・二年、三・四年、五・六年がそれぞれ複式学級である。特別支援学級を含め、四学級の極小規模校である。今年度は町の研究推進校の指定を受け、児童の実態や教師の願い、これまでの研修や指導の経過をもとに、外国語活動における言語活動をどのように展開し、どのように児童の表現力を高めていくのか研究を続けていくことにした。

三 教員の指導力を高める校内研修

校内研修において教員が成果を挙げていくために、研究授業をも

とにした話し合いを大事にしてみました。そして、お互いに学んだことを次の研究授業に生かしてきました。そうして、児童が生き生きと表現できる外国語活動の授業をみんなで追求していきました。研究授業を重ねていく中で、各自が得たものをその後の授業に生かすなど、自らの指導力の向上につなげていく様子が見られました。

教員の力量を高めていくために外部の講師を招聘し、指導・助言を仰ぎました。そのことにより、授業で何を大切にして、どのように授業を組み立てていけばいいのか等について知ることができ、研修がより充実したものになりました。

共通の目標に向けて研修を進めていくことで、教職員それぞれが学び合い、自校の外国語活動の授業を創り上げていくことができました。同時に、教職員が一丸となつて、前向きに授業改善に取り組もうとする雰囲気大切に、研修を進めていくことができました。

研修を進めていく中で、研修主任に働きかけ、研修の方向づけをしていくように助言しました。研修主任が他の教職員をまとめていく力をつけていくなど、リーダーの意図的・計画的な育成も、研修をより充実したものにしていくた

めに大切にしてきました。

四 組織で成果を共有し、今後につなげる

秋に公開研修会を行いました。今年度の研修のこれまでの経過を発表しました。公開した外国語活動の授業では、子どもたちに表現するための技術を身につけさせ、表現する場を工夫することで子どもたちは意欲的に活動するともに、自らの力を発揮していました。

これまでの研修を通して職員は、児童や学校の実情をもとに指導内容や指導方法を工夫していくことで、子どもたちが生き生きと表現していくということを実感することができました。また、共通の目標に向けて取り組むことにより、一定の成果をあげることができ、次への意欲につなげていくことができました。

五 終わりに

今後も、児童や学校、地域の実情に合った指導内容・方法を探り、指導の充実を図っていくための研修を推進していきたいと思っています。そうして、共通の目標達成に向けて学び合い、切磋琢磨していく中で、個々の指導力の向上をめざすとともに学校の教育力を高めていきたいと思っています。

「授業改善」の推進

四日市市立富田中学校

校長 丹羽 伸也



社会は大きく変化しており、情報化やグローバル化、少子高齢化などの社会の急激な変化に伴い、複雑化した諸課題へ対応することが、学校教育に求められています。そうした様々な課題の中で「今日的な課題」となると、子どもたちに「どのように主体的に学ばせるか」が筆頭として挙げられるのではないのでしょうか。

然しながら、実際に授業を参観すると、教員が熱心に指導はしているものの、子どもたちが主役となっていない場合があり、「主体的な学び」の機会が十分確保されていません。子どもたちに、「生きて働く知識や技能」「新しい時代に求められる資質・能力」、いわゆる「確かな学力」を身に付けさせるためには、「授業改善」が何よりも重要であると考えます。

「知識」や「技能」が、日常生活や社会において活用できるように

するためには、子どもたちが主体的に課題を設定したり、探究したりできるように、授業の在り方を見直したり改善したりするべきです。「確かな学力」の捉え方が不十分であったり、これまで培ってきた授業の進め方が変えられなかったりと、思うように「授業改善」は進んでいないのが現状です。

そこで、「確かな学力とは何か」「子どもたちの学び方を変えるためにはどのような工夫や改善をすれば良いか」について、各教職員と対話を重ね、気づきを共有することで「授業改善」につなげていきたいと考え、授業参観後に一対一でじっくりと話す機会を設けるようにしています。

まず、「確かな学力とは何か」を一緒に考えます。①「知識・技能の習得」は、知識や技能をただ身につけるだけでなく、社会で生かせるものにする必要があること。②「思考力・判断力・表現力の育成」については、様々な意見や情報から考えたことを、他者に伝える力を身につける必要があること。③「学びに向かう力・人間性の涵養」については、学ぶことそのものに魅力を感じ、豊かに主体的に探究できていなければいけないことを確認しています。

また、「子どもたちの学び方を変えるための工夫や改善」について、①子どもたちがその授業で何を学ぶのか、何を解決するのかについて「見通し」が持てるようにすること。②「対話的な学びの促進」のために、子どもたちの発言を教師だけでなく学級全体で受け止め共有し、それに対する意見や質問を促すとともに、別の言い方で説明させたり、つないだりすること。③「知識や技能の活用」のために、習得した知識や技能を次の授業はもちろんのこと、他の授業や教育活動、日常生活や社会において活用できるように、子どもたちの頭の中で結びつけること。

これらを、各教職員と忌憚なくかつ楽しく対話する中で、具体的な改善方法を各教職員と共有したり、自ら課題や改善点に気づくよう働きかけたりしています。また、これらを実現するためには、何よりも教師自身が資質・能力を高め、日々の授業が、教科の本質に迫り、知的好奇心に溢れた魅力的なものであればならないという自覚も促しています。

このように、校長と授業者が互いに学び確認することで、子どもたちの学びを変えていくことが、時間がかかるようで、実は授業改善の一番の近道だと考え、取り組んでいます。

県教育委員会との懇談会

「学力向上」「若手教員等の人材育成」 「教職員が働きやすい環境づくり」をテーマに

平成三十年十二月十日(月)

於・県庁教育委員会室

小中学校長会役員と県教育委員会
教育長および幹部との懇談会が、県
教育委員会室において行われました。
その概要について報告します。

まず、西村会長から、日頃の県教育行政に対しての感謝の意を表し、この懇談会で学校現場の様子を伝えさせていたきたいとの挨拶で始まりました。続いて廣田教育長から、子どもたちのために献身的に様々な対応をしてくれていることへの感謝と、「管理職の給与減額」への申し訳ない気持ちと理解へのお願ひ、この会を現場の声を聞くいい機会としたいとの挨拶がありました。



西村会長あいさつ

(一) 学力向上に向けた取組について



教育長あいさつ

◇水野学力向上推進PT課長補佐兼
班長の説明

本年度の全国学調から、経年の課題である「文章を正確に読み取り、考えを書くこと」(国語)や「割合・図形」(算数・数学)に付いて改善が図られず、学習内容の理解・定着状況の確認が不十分である。子どもたちのつまづきを年度内に克服する取組を計画的に進め、子どもたち一人ひとりの学習内容の確かな理解と定着を図ることが重要である。そのため、以下の二点について取り組んでいく。

①学習内容の理解・定着を図る取組
「学Viva第12弾」の提供、「分かる・できる育成カリキュラム」の提供、「みえスタディ・チェック」

の活用、「子どもたちの理解・定着状況に応じた少人数指導」

②授業改善に向けた取組(「めあての提示」と「振り返る活動」の効果的な実施、校長による授業の見回り)

◇西村会長の提案

特別委員会の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組に係るアンケート結果から、学力向上の指標にするものとして、学調が約87%、みえスタが約70%だったこと。学力向上をめざす必要な視点としては、授業改善が約88%と、圧倒的に多かったこと。また、三点セットの活用では、郡市校長会でも取り上げてもらって、活用の促進を図っていること。等の提案があった。

《意見交換》

◇様々な子どもたちや保護者への対応が必要な現状があり、加配等、人材確保が一層の学力向上に結びつく。

◇新学習指導要領で示されている考え方の根本的な所に目を向けて教員が学んでいく研修をしていかなければいけない。

◇研修の日常性と当事者性が大事。授業研究で、「一人ひとりの子どもがいかに学んでいたか」という視点で、授業者以外の参加者が見て、子どもの学びがどうだったかを、考えていく。参加者の力量が問われる、そんな校内研修を行うよう教員に話している。

◇県の授業実践研修では、中堅教員(十一年次)がリーダーシップをとっている。是非、こういった中堅の先生方を校内研修の中心に据えていただいて、ミニグループで授業を見合うなどの研修をすれば効果が出るし同僚性も高まる。

◇新学習指導要領の説明会を昨年度までの集合研修からネットDE研修に変えた。主体的に取り組んでいただく必要があるが、都合のよい時に、何回でも研修できる利点もある。

◇少人数等の加配が必要なのはよく分かるが、一方でいろいろな所で成果を求められ、県民に示していく必要があるのも事実。

(二) 若手教員等の人材育成に向けた取組について

◇深見副会長の提案

規模の大きな学校では、20〜30代が50%を超えている現状があり、中堅・ベテランが一人ひとりでいねいに見ていくことができなくなっている。力量をつけていくために、校内研修を中心にミニ研修・校長との面談・学年主任等の指導・日常的な声かけ等しているが、学習指導や生徒指導での指導力をつけていくためには、本人が探求心を持って、子どもと向き合う中で力をつけていくことが重要になってくる。また、県の「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」も相対的な指標とし

て、若手、ベテラン問わず、目的意識を持って力量アップの指針にして欲しい。等の提案があった。

《意見交換》

◇若手教員の研修を県や市で実施してもらって、ありがたい。管理職もここ何年間で多くが退職する現状もあり、次の時代の管理職やミドルリーダーを育てるために、多くの人に行政経験を積ませるようなことを考えていって欲しい。

◇深見副会長の話にあった「指標」に基づき、面談等の際に、話してもらえそうなことを県の方でも考えていきたいし、学校の方でも意識しながら取り組んでもらいたい。

◇管理職の8割がこの3年で交代する。次世代育成として、いろいろなノウハウを伝えていく必要があるという話を校長会でもしたが、県の方でも考えていってほしい。

◇初任者に渡しているハンドブックは、毎年各課の最新情報が入っているの、教員への指導の参考にしてもらいたい。県総合教育センターのホームページからダウンロードできるようにしている。

(三) 教職員が働きやすい環境づくりについて

◇川岡副会長の提案

このテーマは、今日の学校教育の喫緊にして最大の課題である。働き方改革の主たるゴールは、教育の質の向上だと思っている。この取組を



通して子どもたちと向き合う時間が
増え、教育者としての仕事により魅
力的になればいいなと思っている。
各校、業務の点検・見直し等、創意
工夫して小さいことからでも行っ
ているが、限界もある。多忙化解消に
向けた加配等の条件整備を今後もお
願いたい。また、県教委・県校長
会で引き続き、県民や保護者への周
知、調査・報告、研修会・会議等の
精選等、働き方改革に取り組んで、
総勤務時間縮減、ひいては学校教育
の質の向上につなげることができ
よう、ご支援・協力をお願いしたい。
等の提案があった。

○県で統一した取組をしているが、
やはり各校の実情にあった取組を
学校現場で進めてもらうことが大
事だと思う。

○この取組は、限界に近いところま
でできているように思う。教職員増
がやはり必要である。

○各校の要望に十分応えられていな
いのは十分分かっている。今年も
でき得る対応はさせてもらいたい
と考えている。

出席者

三重県教育委員会

教育長

廣田 恵子

副教育長

木平 芳定

次長（教職員担当）

梅村 和弘

次長（学校教育担当）

宮路 正弘

次長（育成支援・社会教育担当）

森下 宏也

次長（研修担当）

山本 嘉

教育総務課長

榎屋 眞

教職員課長

早川 巖

学力向上推進PT課長補佐兼班長

水野 和久

研修推進課班長

古市 卓司

三重県小中学校校長会

会長

西村 茂

副会長

深見 充弘

幹事

川岡加寿子

森田 定

松井 幸生

野々 文彦

山本 究

山下 高弘

山田 洋一

中川 克巳

柳田 誠司

柳田 誠司

竹原 巧

事務局長

大西 学

事務局次長

森田 正美

本部役員だより

心をひとつにして



三重県小中学校校長会

中学校部会長

深見 充弘

今回の学習指導要領では、「課
題の発見・解決に向けた主体的・
対話的で深い学び」の視点から、
学習課程や指導方法の不断の改
善が求められています。児童生
徒が社会の変化に主体的に向き
合い、自らの可能性を発揮し、
よりよい社会と幸福な人生の作
り手となれるよう力を付けさせ
ていかなければなりません。

全国学力・学習状況調査にお
ける平均点に一喜一憂する必要
はありませんが、自校の課題を
踏まえ、学習指導要領で求めら
れている力を確実に身に付けさ
せる必要があります。児童生徒
が「わかる」「できた」ことの喜
びを実感できるよう着実に取組
を進めていくことは、教職員と

しての職責であり、校長はそれ
を指導し推進していく責任者で
あると考えています。

若手教職員が年々増加してい
ますが、全教職員の個々の指導
力向上やコミュニケーション力
の向上は、児童生徒の能力向上
のためにも、校長が指導力を発
揮し計画的に取り組んでいかな
ければならない課題であると考
えています。

また、情熱に満ちあふれた教
職員が健康で安心して働けるよ
う「学校における働き方改革」
をすすめていくことも大きな課
題となっています。会議の精選
や持ち方など、各学校で改善は
すすんでいます。多忙な状況
はまだまだ改善されていません。

大切ではあるが、優先順位の低
い行事等は、「統合」「廃止」を
一層すすめるとともに、「部活動
ガイドライン」に沿った運用を
実施していくことや、各種の研
究会・研修会等の持ち方につい
ても、県全体でより具体的に検
討していく時期にきていると感
じています。

生徒や保護者・地域の方々か
らの信頼と期待に応えていくた
めにも、校長は学校教育が正に
今、変革期にあることを再認識
し、三重県小中学校長会会員の
連帯をもとに、教育関係機関や
諸団体と連携を密にし、課題解
決に向け取り組んでいかなけれ
ばならないと思います。

この一年間、三重県小中学校
長会として、様々な課題に取り
組むことができたのも、皆
様方のご支援・ご協力があつて
のことと感謝いたしております。
三重県小中学校長会が、教育に
対して責任ある組織として、ま
た牽引役として、これからもしっ
かりとした実績を残していけま
すようご理解ご協力をよろしく
お願いいたします。



私の 薦める一冊

『家康、 江戸を建てる』

門井慶喜

名張市立名張中学校

校長 和南 義一



受話器を置いて、「これは困った」と、しばし唸った。

校長会の広報の「私の薦める一冊」への原稿依頼を受けたものの、何を面白いと感じるかは人それぞれ。そして、その日の気分によっても変わってくる。小説、ノンフィクション、ビジネス書、絵本、写真集、漫画等。やる気を出すため、リラクゼーションしたい、何かヒントがほしい等等も異なってくる。

さてさて、どうしたものか。悩んだ末に、最近話題となっている本から選ぶことにした。

本著は、関白秀吉の国替え要求を受け入れ、ピンチをチャンスに、当時の水浸しの低湿地ばかりの土地に、家康が江戸の町を創り上げていくという小説である。が、主人公は家康というよりは、その時代に生きた職人たちを中心に描かれている。

利根川の流れを大きく曲げ、金貨を鑄造する。奥多摩から飲み水を引き、江戸城の石垣を積むなど、その一つ一つに命をかけた職人の情熱と技術が、家康の夢を実現していく話である。正月時代劇としてテレビドラマ化が決まったとのことなので、映像から興味を持たれた方は原作を読んでみるのいかがでしょうか。

最初にこの本を手にとった動機は、家康が与えられた土地をいかにして、町として栄えさせたのかという歴史的興味からだ。今は、定年退職を迎える年になり、いかに学校を創り上げるかという面でも感じるところがある。

家康の家臣と職人たちは、名誉欲ではなく、やりがい求めて、己の仕事にプライドを持って江戸を「建てた」のだ。

子どもたちのためにと、使命感を持って取り組む教職員の姿と、私には重なって見えた。

この広報が発行される頃には退職を間近にし、感慨深くなっているのだろうか。残りの時間、なかまの教職員と一緒に、やらされるのではなく、やりがいを持って取り組んでいきたいものだ。先輩方が積み上げてきたことを大事にして、「学校を建て続けたい」。

随 想

みなさんに感謝

亀山市立白川小学校

校長 川合 正男



教員生活三十八年が過ぎようとしています。たくさんさんの思い出がある中で次の二つが心に残ります。

一つは、教諭時代の亀山市立神辺小学校。社会科の研究をしていた時、実際に住める堅穴式住居を造ろうということになり、当時の保護者や地域の方が協力してくださり完成させました。トラクターミナルで運転手さんに聴き取りをしたり、サンシャインパークにある池の水確保の苦労を地域の人と調べたりしたことを思い出します。

もう一つは、教頭で二年間、校長

で二年間勤めた亀山市立白川小学校。木造校舎で、国の登録有形文化財に指定されている学校です。

教頭時代から気になっていたことで、崩れた炭窯を景観も悪いので何とかならないか、そして炭が焼けないかと地域の方に相談しました。

みんなでやろうと地域の方が積極的に協力してくださり、炭焼きまで出来ました。

そこに大人の手を広げて二人分の幹まわりの桜があり、広場を整備して子どもも地域の方も集える場所にしたらとコミュニケーション・スクールの会合で話になりました。本年度着々と整備が進んでいきました。

地域あつての学校です。どのような学校にしていくなのか白川小学校だけしかできないことをやろうという夢を持ち、実現に向けて進めてきました。

大切にしてきたことは、自分から地域へ出向き、だれにあつても笑顔であいさつ、コミュニケーション。情報発信。

温かい職場・良き職員に支えられ、みんなが一つになってやっていくという雰囲気地域に伝わっていくのがうれしかったです。

そして、子どもたちが、みんなに見守られ、すこやかにやさしく成長していく姿をみれることが何よりでした。

「先生、退職したら何すんのやな。」
「自然相手にたくましく生きるわな。趣味の養蜂をして」

みんなに感謝。そして、次なる夢を追いかけていきます。

人生には 平均の法則が 作用する

志摩市立磯部中学校

校長 舟戸 宏一



生涯アマチュアを通したゴルフファア、中部銀次郎は、「ゴルフには平均の法則が作用する」という言葉を残しています。大叩きしても腐らないで、どこかで良いこともあるだろうと淡々とプレーを続けていけば、必ず流れは自分に来るもの、ラッキーとアンラッキーは必ず同じ数になると説いています。アンラッキーばかり嘆き、ありもしない技量を期待して取り返そうとするから泥沼にはまる、そんな経験は、私を含め、ゴルフされる方にとって一度や二度ではないでしょう。この言葉の「ゴルフ」を「人生」に置き換えてみると、人生に対する深い言葉になることに気が付きます。

自分の教師としての人生を振り返った時、四十代前半までは、荒れの中にいた生徒たちとの日々が思い出されます。生徒指導に走り回っていたあの頃です。それが四十代後半

からは関わる生徒が実に穏やかに
なってきました。私たちが何か特別
なことをやったわけではありませ
ん。そこにはきっと家庭や社会の変
化が影響していると思います。しか
しただひとつ言えることは、いつの
ときも教師集団として子どもたち
に丁寧に関わることを大事にしてきた
ということ。この諦めずに淡々と
関わってきたことが流れを呼んだ
としたら、まさにそれが平均の法則
ではないでしょうか。逆に太平に胡
坐をかいていると、大変なことにな
ることもあります。良くも悪くも
同じ状態が続くことはないのです。
今の状況を嘆くだけでなく、淡々と
次の風を待つこと。今の状態に安心
せず、次の風に備えること。風は必
ず変わるという希望と用心こそが、
私が得た人生の教訓とも言えます。
そしてあんなに荒れを見せて卒業し
ていった生徒が、この夏、本校の校
舎の改修工事に汗を流している姿が
ありました。そんな姿にも人生にお
ける平均の法則を感じながら、卒業
生と仕事や人生を語り合えるよう
な付き合いができるようになったこ
とに、教師としての仕事の意味を改め
て考えさせられています。



あの時、あの人

『地域教材化の醍醐味』

東員町立三和小学校

校長 川村 光次



「うちの学校の歴史をやってくれ
るか？」

これは、当時、K校長先生から
6担の私に頂いた言葉だった。前々
年に学校創立百周年を迎えていた
ことと、地域教材を何より大切に
された校長先生は、学校の歴史を
掘り起こし、教材化することによつ
て「明治の近代化」を子どもたち
に指導して欲しいという願いをお
持ちだった。校内研修として扱う
ことで、歴史学習の明治期の独自
プランづくりの一環として学校の
財産にもなる。今にして思えば、
人材育成として私を鍛えて頂くこ
ともあったのだらうと思う。

明治時代を授業で扱うのは二期
期であるため、教材の掘り起こし
や単元構想づくり等のいわゆる教
材化は夏休みにじっくりと取り組

むことが出来る。しかし、いざ取
りかかってみると、これは本当に
大変なことだった。

まず、町史・学校百年史・学校
沿革史（校長室の金庫に保管され
ている）に細かく目を通し、その
中で分かってきたことについて、
授業展開を構想しながら、学校の
変遷毎の文章整理、年表の作成、
就学児童数のグラフ化等を行っ
た。他にも、現地調査や古老への
聞き取り等も行い、資料の一端と
した。

次に、単元のねらいを達成するた
めに、調べたことや資料をどう生
かし、授業を組み立てていくか、
これらかなりの困難を極めた。しか
し、学年団が力を合わせ、何とか授
業ができるまで漕ぎ着けた。

授業での子どもたちは、いつも
の目とは違った。「ぼくの曾々じ
いちゃん？」「あの場所にあった
ん？」地域の人々・地域の場所が
具体的な名前前で登場し、子どもた
ちの意欲や関心が増幅するのが分
かった。「地域の方々の協力で、今
私たちが学校に通えるんやね。」遠
い昔のどこかの話ではなく、自分
たちにつながる具体的に身近な出
来事と認識し、大きな感動を伴っ
た。

ひと夏の私の経験は、授業づく
りの喜びと難しさの両方を学ぶ貴
重な機会となった。授業づくりの

視野を広げ、授業の本質を問う観
点を私に与えてくれたように思う。

『つなぐ』

御浜町立御浜中学校

校長 甫本 紀人



振り返れば、教壇に立ち様々な
人々との関わりの中で過ごさせ
ていただいた、あつという間の
三十六年間であった。「教育は人づ
くり」とも言うが、私自身、幾多
の子どもたちに、人として、育て
られたことか。純粋な子どもたち
の姿から、「人間の本质とは？」を
学び、そこには数多の気づきがあつ
た。これも偏に多くの諸先輩先生
方のお導きのおかげと感謝に堪え
ない。

その中で、濱上吉雄校長先生（故
人との出会いがある。まさに「質
実剛健」という言葉がピッタリの
先生であった。昭和の厳しい時代
を生きた抜き、校内暴力等、課題が
山積する中で常に生徒と関わり、
全身で自己の教育活動を語られる
姿に圧倒された記憶がある。

私が赴任して二年目の春、校長
室で数人の職場代表者に向けて、
「外（外部）のことはワシがやる
から、（学校の）中のことは、任せ
たぞ」と仰いました。今思えば、
三十過ぎのまだまだ頼りない生意
気な若造達に「任す」ことがどれ
だけ不安だったことだろう。しか
し、その思いに応えるべく、時を
忘れて子どもたちと様々な活動に
心血を注いだ記憶が走馬燈のよう
に巡ってくる。

昨年、当時の教え子達が四十二
歳の厄年を迎え、開催された同窓
会に招待された。成長した姿に目
を細めながら、昔話に花が咲いた。
ただ、咲いたのは、今では耳を塞
ぎたくなるような花でもあった（反
省）。その時、子どもとの親となつた
教え子が、今の教育現場を憂うよ
うに、「先生の育てた後輩の先生が
いたら会ってみたい・・・」と真顔
で迫ってきた。酔いの勢いもあつ
たが、あらためて考えてみると、
私自身、多くの諸先輩先生方に育
てていただいたという思いはある
ものの、次代に引き継ぐ後輩たち
にどれだけ役に立ってきただろう
うか。ただただ申し訳なく思うば
かりである。

濱上校長先生を初めとする諸先
輩方が築き上げてきた遺産を、次
世代の前途ある後輩達に繋ぐ役割
をどれだけ果たしてきたのだろう
か。子どもたちも含め、教師が繋
がり合い学校という社会が形成さ
れ、今後に生かされることを願い、
筆を置きたい。

地区校長会だより

桑名郡市小学校長会

本年度、6月29日に開催された小学校長会の様子を記載すること、本会の様子を紹介します。

最初の協議事項は、卒業式における卒業生の服装についてです。卒業生の服装が年々華美になる傾向が広がってきており、保護者、来賓、地域の方々から様々に心配の声をいただいています。協議の結果、本会、市P連、市教委の連名で「卒業式は最後の授業である」という趣旨をご理解いただき、ふさわしい服装で望むようご配慮をお願いしました。」という文書を出すこととなりました。

次は市教委への予算要望についてです。「要望書がきちんと仕上がってきている。」という意見を受けて、「それは、要望がほとんど実現できていないということだと改めて感じた。」という発言がありました。近年、予算が厳しいことから、まったくそのとおりです。それでも、会長さんの話から、ICT整備は少し前進しそうです。言い続けることが大切だということも確認し合いました。



最後は情報交換です。6月18日の大阪府北部地震発生を受けて、通学路点検をどのように行うかについて交流しました。「翌日、直ちに職員で分担し、危険箇所の写真を撮ってくるように指示をした。状況により通学路の変更もありという事で現在集約している。」「予定していた分団下校を利用して、教員は子どもたちとともに歩きながら、危険箇所を確認させる予定です。」

校長は、学校に戻れば一人です。仲間の意見や情報を聞くことで、自信をもって学校運営を行うことができます。やはり、校長も仲間とつながっていることが大切ですね。

尾鷲市北牟婁郡中学校長会

「少数ならではのつながりを活かして」

「紀北」と呼ばれる私たちの地域は、平成十七年に北牟婁郡の紀伊長島町と海山町が合併して一郡一町となった紀北町と、尾鷲市の二市町からなります。豊かな自然に恵まれ、海の幸、山の幸とおいしいものがたくさんあります。私たち中学校長会も、時折食事に出かけては、舌鼓をうちながら親睦を深めています。

さて、尾鷲市・北牟婁郡中学校長会は、尾鷲市2校、北牟婁郡紀北町4校、計6校の中学校（尾鷲中・輪内中・紀北中・赤羽中・潮南中・三船中）からなる組織です。本会は、校長としての職能の向上と各中学校間の連携のもと紀北地域の教育力の向上を目的とし、経営能力を高めるための研修や紀北の中学校教育の充実を図るための活動を推進しています。月一回の定例会では、さまざま

な課題についての協議、各校の教育活動など学校づくりの取組についての交流・情報交換などを行っています。たった6人と少人数であることもあり、日々の課題や悩みを共有し、ともに考え合い、本音で話し合える関係ができています。それぞれの校長の考え方や学校経営を学び合うことで、時には視野を広げたり、時には自校の取組に確信をもてたり、大変有意義な会となっています。

また、小学校も含めた紀北校長会として、年2回の研修大会を実施しています。退職された先輩校長から学校経営を学んだり、人材育成・総勤務時間の縮減・防災な



どについて討議や情報交換を行ったりして、修養に努めています。今後も、少数ならではのつながりを活かして、紀北地域の中学校教育の充実と発展に取り組んでいきたいと思っています。

編集後記

三寒四温と言われる時期となり、校庭の梅の木に咲く美しい花びらが春の訪れを告げています。学年末を控え、卒業式の準備や今年度のまとめ、そして新年度を迎えるにあたっての企画など大変お忙しい日々をお過ごしのことと思います。

さて、「校長会みえ」も年三回の発行を無事に終えることができました。これもひとえに、多忙な中での原稿執筆やご協力いただきました皆様のお陰と深く感謝申し上げます。

今年度も各学校において、小学校の「特別の教科道徳」の本格実施をはじめとする新学習指導要領への対応、全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックから明らかになった課題克服への取組、部活動ガイドラインに沿った部活動運営方針の策定など、さまざまな教育施策に取り組みされたことと思います。各校長先生におかれましては、「子どもたちにとってどうなのか」を問い続けてマネジメントされたことでしょう。総勤務時間縮減に関する取組においても、教職員やその家族にまでも思いを馳せて語りかけたのではないかと思います。学校教育における課題は山積し、多様化・複雑化しています。

やもすると課題対応に追われ「孤独」を感じることも少なくありません。そんな時、課題解決の情報やほっと一息つける「校長会みえ」の大切さを実感しました。今後も県下の各小中学校長が繋がりあえる誌面作りを全会員で目指しましょう。

一年間のご愛読、有り難うございました。